【論　　文】

英語の存在文の文法性と定性制約について
―定名詞句の統語構造からの再考*

増　冨　和　浩

1. はじめに

本稿では、英語の存在文（以下では「there構文」とする）の文法性について、意味上の主語の統語派生の観点から再考する。一般に、there構文には定性制約（definiteness restriction）が課せられるため、theやthatなどが導く定名詞句がthere構文の意味上の主語として用いられると非文になると分析されている（cf. Milsark (1974), 池内（1985）、Lumsden (1988), Belletti (1988) など）。

（1）There was a/*the table in the garden.

ただし、定名詞句がthere構文の意味上の主語として生起可能な場合があることも指摘されている。例えば、（2）がHave you ever seen the cat near here? などの疑問文の答えとして発話された場合、定名詞句ではあるが、the catは問題となる談話においては新情報と解釈されるため容認可能と説明される。

* 本学会の匿名の査読委員の方には、内容に関する丁寧かつ有益なご助言・ご指導を頂いた。この場を借りて、深く感謝申し上げたい。残る不備・遺漏は筆者一人に帰せられるべきものである。

『英語と文学、教育の視座』290-301

（2）There is the cat in the yard.　(Dobrovie-Sorin and Beyssade 2012: 101)

このような例を踏まえて、there構文における意味上の主語の生起条件は、限定詞の種類のみでは説明できないことが、意味論的あるいは語用論的観点から指摘されている（Bolinger (1977), 池内（1985）、Lumsden (1988), McNally (1998) など）。しかし、「意味解釈は統語構造に基づいて行われる」という生成文法で採用されてきた前提に立つのであれば、there構文の文法性に対しても、統語的要因が関与する可能性を議論する必要があると考えられる。そこで、本稿では、there構文の意味上の主語の内部構造の観点から、there構文の文法性について議論する。

2. 定名詞句を意味上の主語とするthere構文

具体的な議論の前に、there構文に定名詞句が生起する環境について整理しておく。

（3）a. Q: “What’s worth visiting here?”
A: “There’s the park, a very nice restaurant, and the library. That’s all as far as I’m concerned.”　(Rando and Napoli 1978: 300-301)
b. There’s the possibility that John will come in time.（池内 1985: 122）
c. There was the son of a neighbor at the party.
(Dobrovie-Sorin and Beyssade (2012: 101)
d. There is the mailman coming.　(ibid.: 99)
e. There was the same tendencies noted in France.（Lumsden 1988: 153)

there構文の意味上の主語は通例「不定」であるとされるが、「不定」の解釈については、談話内での「新情報」である、具体的な指示対象物ではなく「（名詞が表す）種類・性質・量」である、あるいは、「集合に含まれる要素の一部」であるなどいくつかの提案がある（cf. 池内（1985）、Belletti (1988), McNally (1998) など）。従って、定名詞句であっても、何らかの理由で、このように解釈されれば、文法上の形式とは関係なくthere構文に生起可能と指摘されている。上記の例で言えば、まず、（3a）の例はいわゆ

るリスト文と呼ばれる例で、列挙された個々の項目は既知であっても、リスト全体の中でどの項目を選択したかという点が新情報となっている。一方、(3b, c) の例は、theが後方照応として用いられているため、後続する修飾語句により初めて指示対象が同定可能となる点で、問題となる談話にとっての新情報と考えられる。(3d) では、the mailman は定名詞句であるが、後続するcomingまで含めた出来事全体が新情報と解釈される。さらに、(3e) が文法的であるのは、the tendencies自体は特定の事象を指示できるが、sameが加わることで指示対象が（傾向の）「種類」に変化している。

以上のように、there構文の文法性は意味論的・語用論的に分析されることが多いが、冒頭でも言及したように、本稿では統語構造が及ぼす影響について考察する。

3. 分析の対象

前節で示した例のすべてに統語的要因が関わるかという点は慎重な議論が必要であるが、表層構造の点から、統語的要因が関与すると考えられる例について考察する。(4a) はいわゆるthere構文における定性制約の違反を示す例である。一方、(4b) は基本的には同じ表層構造であるが、DPの補部に前置詞句が加わることで文法性が変化することを示している。

(4) a. *There was [$_{DP}$ the table] in the garden. (cf. (1))
b. There was [$_{DP}$ the son of a neighbor] at the party. (= (3c))

これらの対比は、意味上の主語の内部構造がthere構文の文法性に影響する可能性を示唆していると考えられる。なお、名詞句の定性とその補部との関係は、(5) が示すようなwh移動の文法性にも関わっており、統語的な影響力を持つと考えられる。

(5) Who did you see [$_{DP}$ a/*the picture of t_{who}]?

4. 分析と提案

（4a, b）に示したtheの用法は、それぞれ前方照応と後方照応である（cf. 池内（1985））。以下の議論では、there構文に生起可能な後方照応の定名詞句については、不定名詞句の統語構造と比較しながら検討する。他方、there構文において非文法的とされる前方照応の定名詞句については、同様に前方照応の用法を持つthatなどの定指示詞を含む名詞句の統語構造を考慮に入れて議論する。なお、統語派生に関わるメカニズムについては、Chomsky (2000, 2001, 2008)などのミニマリスト・プログラムの枠組みに従うが、Chomskyなどの分析では名詞句内部の一致操作（Agree）に関して議論されることが少ないため、次のような仮定が必要であると考えられる。

（6）a. DPの主要部Dは、人称・性・数に関する解釈不可能なφ素性（[uφ]）を持ち、一致操作により照合されなければならない。
b. 定冠詞は、指示性に関する解釈可能素性（[+def(inite)]）を持つ。
c. 不定冠詞は、指示性に関する解釈可能素性（[−def]）と、数に関する解釈可能素性［singular］を持つ。

4.1. 後方照応のtheに導かれる名詞句の統語構造について

まず、後方照応のtheを伴う定名詞句の派生について、不定名詞句の派生過程を踏まえながら議論する。ミニマリスト・プログラムの枠組みで考えると、（7a, c）に含まれる名詞句の派生過程及び構造は、（7b, d）のようであると考えられる。

（7）a. There was [$_{DP}$ the son of a neighbor] at the party. (= (3c))
b. [$_{DP}$ [$_{D}$ the] [$_{NP}$ son [$_{PP}$ of a neighbor]]]
~~[uφ]~~ [φ] Agree
c. There was [$_{DP}$ a son of a neighbor] at the party.
d. [$_{DP}$ [$_{D}$ a] [$_{NP}$ son [$_{PP}$ of a neighbor]]]
~~[uφ]sg~~ [φ]sg/*pl Agree

（7b, d）の名詞句の派生では、まずsonとof前置詞句の併合によりNPが形成される。次に、定冠詞theおよび不定冠詞aが主要部Dに基底生成する形で派生に導入され、NPと併合することでDPが形成される。この構造で、Dの解釈不可能なφ素性（[uφ]）は、（6a）の仮定により、解釈可能なφ素性（[φ]）を持つNPの主要部sonとの間で一致操作（cf. Chomsky (2000)）を行うことにより照合される。ただし、Dに不定冠詞aが生起する(7d)の場合は、Dのφ素性のうち「数」に関しては単数であるので、NPの主要部のφ素性が単数の場合にのみ文法的である（cf. (6c)）。また、DP全体の指示性は、（6b, c）の仮定により、theとaがそれぞれ指示性に関して［+def］と［−def］の素性を持つので、これらの要素が主要部Dに基底生成することにより、定および不定となる。

（7b）の定名詞句の構造においては、NPの主要部sonはof a neighborにより限定修飾されている。これにより、名詞sonの集合の範囲も限定され、theの指示対象がDP内部で同定可能であると仮定とすると、theが先行文脈内の旧情報にアクセスする必要はない。従って、（7b）は「定名詞句ではあるが旧情報ではないためthere構文に生起可能である」とする先行研究の分析に適合した構造を示すと考えられる[1]。

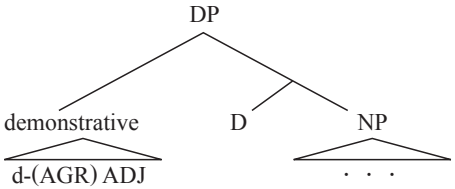
4.2. 前方照応のtheに導かれる名詞句の統語構造について

4.2.1. Leu (2015) の分析

名詞句の統語構造がthere構文の文法性を左右するという本稿の立場では、there構文において非文法的となる*There was the table in the garden (=(4a)) などに含まれる前方照応の定名詞句の構造は、前節の分析とは異なると予測されるが、具体的な議論には、同じ前方照応の用法を持ち、there構文に生起できないという点でも同じ特性を持つthatなどの定指示詞の分析が参考になると考えられる。この点に関して、Leu (2015) が、ドイツ語やスカンディナヴィア語（Scandinavian）の定名詞句の統語構造について興味深い提案をしているので、まず、Leuの分析を概観する。

Leu (2015) は、ドイツ語やスカンディナヴィア語の定指示詞に導かれた名詞句の統語構造を次のように分析している。

（8）



（8）の構造における表記について確認しておくと、形態素d-は定性を示す標識（definite marker）、AGRは定指示詞が示す形態的な一致を担う形態素（ドイツ語ではderの-erなど）、ADJは音形のない直示的・照応的な形容詞（Leu (2015)ではHEREやTHEREなど）を示している[2]。（8）に示すように、Leuの分析では、定指示詞は単独の語彙項目ではなく、音形のない形容詞を伴って句を形成し、DP指定部に基底生成している。このとき、DPの主要部には具体的な要素が生起しないため、主要部Dも音形を持たない。Leuの分析によれば、定指示詞が持つ前方照応的な指示性は、定の標識d-（英語ではth-に相当）とADJの解釈を合成することで生じる。なお、このような分析の根拠として、（9）のような例などが示されている。

（9）a. hus-et (Norwegian)
house-DEF
‘the house’
b. de-t svarte hus-et
that/the black house-DEF
‘that/the black house’
c. de-t hus-et
that house-DEF
‘that house’

ノルウェー語では、(9a)のような形容詞を伴わない定名詞句（plain definite）の場合、名詞の末尾に定であることを示す接辞が生じる。一方、（9b）のように、形容詞を伴う場合は、名詞句の先頭にde-tなどの定の標識も生じ、指示的な解釈が可能となる。さらに、（9c）のように、形容詞を伴わずに定の標識が生じる名詞句は、指示的な解釈が義務的となる。これらの対比

を踏まえて、Leu (2015) は、ノルウェー語などの定名詞句が定の標識を伴うことができるのは、名詞句内に形容詞が生起する場合であるとし、（9c）にも音形のない形容詞を想定すべきであることを指摘している[3]。

以上、Leu (2015) の分析を概観したが、このような分析が正しいとすると、thisや thatなどの英語の定指示詞、さらに、これらと同様に前方照応の用法を持つ定冠詞も統語構造において句を形成していると分析することには、言語普遍性の観点から一定の支持が得られると考えられるので、次節ではこの点を具体的に議論する。

4.2.2. 前方照応の定名詞句の派生過程と構造について

本節では、定性制約により非文法的とされる（10）のような例について、その統語構造と派生過程を具体的に議論する。

（10）*There was the table in the garden. (= (4a))

（10）の例には、the table の集合の範囲を限定する要素は生起していないため、theの指示対象を同定するには、先行文脈を参照する必要があり、theの用法は前方照応であると考えられる。Leu (2015)の分析に基づけば、（10）のthe tableの構造は（11c）のように考えられ、すでに議論した後方照応の場合（cf. (7b)）とは異なる[4]。theは単独の語彙項目ではなく、音形のない形容詞ADJと共に句を形成し、DPの指定部に生起している[5]。なお、英語の定冠詞は形態的な一致を示さないので、AGRは-Øで表してある。DP分析（Abney (1987)）を用いた多くの分析で支持されている仮定では、冠詞は主要部Dに生起するとされており（cf. (7b, d)）、ここでの議論は一見それと異なるように見えるが、［the-Ø ADJ］の内部構造は、［$_{DP}$ [$_{D}$ the-Ø] ADJ］であると考えられ、(11c)でもtheの生起位置は主要部Dであると考えられる。

（11）a. *There was [$_{DP}$ the table] in the garden.

b. [$_{DP}$ D [$_{NP}$ table]]

~~[uφ]~~ [φ] Agree

c. [$_{DP}$ [the-Ø ADJ] D [$_{NP}$ table]]

[+def] ~~[uφ]~~ [φ]

［$_{DP}$ the table］の派生過程については、まず、（11b）に示すように、tableは前置詞句などの限定要素を伴わないので、単独でNPを形成し、主要部Dと併合し、DPを形成する。ここで、主要部Dの解釈不可能なφ素性は一致操作により照合される。この後、（11b）のDPは指定部に［the-Ø ADJ］を併合し、（11c）の構造を形成する。［the-Ø ADJ］においては、the([+def])が定の標識として機能し、（前方照応的な）形容詞ADJの解釈と合成されることで指示性を持つため、the table 全体が指示的に解釈され、その指示対象は先行文脈において同定される（cf. Leu (2015)）[6]。

5. 分析の帰結

5. 1. 一致操作とthere構文の文法性について

ここで、本稿が提案する定名詞句の構造が統語派生においてもたらす帰結について考察し、本稿の分析の妥当性について検討する。本節では、前方照応の定名詞句がthere構文に生起できない理由について、統語派生の点から議論する。

there構文の派生過程が（12）のようであるとすると（cf. 大庭・島（2002））、この構造において、Tの解釈不可能なφ素性は、一致操作により照合されなければならない。

（12）a. ［$_{TP}$ there [T+be] [$_{VP}$ t_{be} [$_{DP}$ [$_{D}$ the] [$_{NP}$ son of a neighbor] at the party]]]

~~[uφ]~~ [φ] Agree (cf. (7a, b))

b. ［$_{TP}$ there [T+be] [$_{VP}$ t_{be} [$_{DP}$ [the-Ø ADJ] D [$_{NP}$ table]] in the garden]]

~~[uφ]~~ × [φ] (cf. (11))

まず、（12a）に示した後方照応のDPの場合には、解釈可能なφ素性を持つthe son（厳密にはson）とTとの間で一致操作が成立し、Tの［uφ］が照合され、これに付随してsonの格素性も認可され、派生が収束すると考えられる[7]。一方、前方照応のDPを含む（12b）においても、Tとthe table（厳密にはtable）との間で一致操作が成立しなければならないが、前節で議論したように、DPの指定部には［the-Ø ADJ］が生起している。ここで、

フェーズ理論の観点から、CP同様に、DPがフェーズであるとすると（cf. 大庭（1999）など）、DP指定部に［the-Ø ADJ］が併合された時点で、DPフェーズは閉じているため、フェーズ不可侵条件（Phase-Impenetrability Condition (PIC)）(cf. Chomsky (2001))により、TはDP補部内のtableにはアクセスできず、一致操作が成立しない。この結果、Tの[uφ]が照合されず、（12b）の派生は収束しない[8]。

5. 2. 前方照応の定名詞句からの要素の抜き取りについて

最後に、本稿が提案する前方照応の定名詞句の構造が、以下のような名詞句内部からのwh移動の文法性についても説明力を持つことを議論する。

（13）*Who did you see [$_{DP}$ the picture of t_{who}]? (cf. (5))

(13)のような例が非文法的である理由は、特定性条件(Specificity Condition)などへの違反であるとして説明されてきた（cf. Fiengo and Higginbotham (1981)など）。しかし、本稿の分析を用いれば、特定性条件などを用いることなく、統語構造の点から説明できると考えられる。

（13）のDPでは、pictureがof who(m)により限定修飾されているので、すでに議論した後方照応の場合のように見える（cf. (7a)）。しかし、疑問詞は指示性を持たないため、theの指示対象は、（13）のDP内部では同定できず、theの用法は前方照応であると考えられる。この場合、本稿の分析では、（13）の統語構造は次のようになる。

（14）*Who did you see [$_{DP}$ [the-Ø ADJ] D [$_{NP}$ picture of t_{who}]]?

×　PIC違反

DPがフェーズであるとすると、DPの補部内にある whoが主節のCP指定部に移動するためには、DPの指定部を経由して循環的に移動する必要がある。しかし、DPの指定部には［the-Ø ADJ］が併合されているため、そのような移動は阻止される。結果として、whoが直接主節のCP指定部へ移動することにより、PIC違反が生じ非文法的な派生となる。このような分析は、thisやthatに導かれた定名詞句にもそのまま拡張でき、次のような文法

性を正しく予測することができる。

(15) *Who did you see [$_{DP}$ this/that picture of t_{who}]?

6. まとめ

本稿では、名詞句の定性とthere構文の文法性の関係について、名詞句の統語構造の点から議論した。議論の過程で、定名詞句には、前方照応か後方照応かによって、二種類の統語構造を想定可能であることを指摘した。さらに、このような分析により、これまで定性制約により一括して説明されてきた言語現象の一部をフェーズ理論の領域で議論できることを論じた。

注

1. タイプ理論の観点から見ると、定冠詞は意味解釈において、タイプ〈〈e, t〉, e〉のイオタ演算子（ι）として機能するが、現在議論している例ではson of a neighbor（タイプ〈e,t〉）に作用し、特定の個体（タイプe）を同定できる（cf. Dobrovie-Sorin and Beyssade (2012) など）。(7d) の不定名詞句の派生では、意味解釈において、存在数量詞が付与され、son of a neighbor (x) を満たすxが存在すると解釈される。
2. 次節以降の議論でも非顕在的な形容詞（ADJ）を仮定しているが、スカンディナヴィア語の口語表現や一部の方言においては、この形容詞が顕在化する場合があり、本稿の分析に経験的な支持を与えていると考えられる。
   (i) a. den *her(r)-e* klokk-a (Colloquial Norwegian)
   the *here-INFL* watch-DEF
   'this watch'
   b. det *der(r)-e* hus-et
   the *there-INFL* house-DEF
   'that house' (Leu 2015: 19)
3. 本稿の議論との関連で言えば、指示性のない（9a）の存在文での容認性が気になるが、標準的なノルウェー語では非文法的とするのが一般的である（cf. Garbacz (2014)）。このことには、英語には見られない定の接辞の存在が関わっている可能性がある。本稿の枠組みでは、定の接辞がどのように派生構造に導入されるかということが問題になるが、以下の英語の議論には直接影響しないと考えられるので、この点は紙面を改めて議論することにする。ちなみに、ノルウェー語の一部の方言では、(9a) タイプの名詞句が存在文に

生起する場合も観察されている（cf. Garbacz (2014: 88)）。

（i）Hvis du er tørst er det *melk-a* i kjøleskap-et. (Norwegian)
if you are thirsty is there *milk-DEF* in refrigerator-DEF
'If you are thirsty, there is milk in the refrigerator.'

4. 本稿の議論は、前方照応のtheと後方照応のtheが区別できることを主張していることになるが、定冠詞の形態がtheのみである英語では、この区別を顕在的に示すことは難しい。一方、他の言語、例えば、後置定冠詞を用いるルーマニア語では、（i）が示すように、前方照応（cf. (ia)）と後方照応（cf. (ib)）の区別が冠詞の形態により示される場合がある（cf. 春木（1985））。（ib）では、un prieten ('a friend') の指示対象は不定であるが、al ('the') が vecinului に由来する後方照応的限定を表している。このような例は本稿の議論を経験的に支持しているが、別の例も含めてさらに考察する必要があると考えられるので、この点は紙面を改めて議論することにしたい。

（i）a. prieten*ul* vecinului (Romanian)
friend-*the* neighbor-the-of
'the friend of the neighbor'
b. un prieten *al* vecinului
a friend *the* neighbor-the-of
'the friend of the neighbor' （春木 1985: 21）

5. this や that が生起する場合も同じ構造で表すことができ、this/that table が there構文に生起できない理由も、5節の議論と同様に説明できる。
6. ADJが具体的にはどのような形容詞であるかという点はさらに議論する必要がある。Leu (2015) では、直示的な定指示詞の場合、ADJはHERE や THERE であるが、定冠詞は、さらに広く先行文脈を参照するので、FOREGOING などが候補かもしれない。
7. there構文における格素性の認可に関してはいくつかの分析があるが、紙面の都合上、本稿では立ち入らないことにする（cf. Belletti (1988) など）。
8. フェーズの指定部に要素が併合された時点で、フェーズの補部がSpell-Outされるとする分析がある（cf. Hiraiwa (2003)）。この分析でも、（12b）に［the-Ø ADJ］が併合された時点でtableがSpell-Outされるため、やはりTはtableにアクセスできない。

参照文献

Abney, Steven Paul (1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*. Doctoral dissertation, MIT.

Belletti, Adriana (1988) "The Case of Unaccusatives." *Linguistic Inquiry* 19: 1-34.

Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*. London: Longman.

Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework.” In Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, MA.: MIT Press.

Chomsky, Noam (2001) “Derivation by Phase.” In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52. Cambridge, MA.: MIT Press.

Chomsky, Noam (2008) “On Phases.” In Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta (eds.) *Foundational Issues in Linguistic Theory*, 133-166. Cambridge, MA.: MIT Press.

Dobrovie-Sorin, Carmen and Claire Beyssade (2012) *Redefining Indefinites*. Berlin: Springer.

Fiengo, Robert and James Higginbotham (1981) “Opacity in NP.” *Linguistic Analysis* 7: 395-421.

Garbacz, Piotr (2014) “Definite Articles in Indefinite Contexts.” *Nordic Atlas of Language Structures (NALS) Journal* 1: 87-93.

春木仁孝（1985）「ルーマニア語の冠詞―後置性の限界と他の限定要素との関係―」『ロマンス語研究』第 18 号、13-23. 日本ロマンス語学会.

Hiraiwa, Ken (2003) “Movement and Derivation: Eliminating the PBC.” *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 9: 89-103.

池内正幸（1985）『名詞句の限定表現』東京 : 大修館書店.

Leu, Thomas (2015) *The Architecture of Determiners*. New York: Oxford University Press.

Lumsden, Michael (1988) *Existential Sentences*. London: Croom Helm.

McNally, Louise (1998) “Existential Sentences without Existential Quantification.” *Linguistics and Philosophy* 31: 353-392.

Milsark, Gary (1974) *Existential Sentences in English*. Doctoral dissertation, MIT.

大庭幸男（1999）「Phase としての名詞句表現」稲田俊明・岩部浩三・大庭幸男・水光雅則・武本雅嗣・西村秀夫編『言語研究の潮流 : 山本和之教授退官記念論文集』21-36. 東京 : 開拓社.

大庭幸男・島　越郎（2002）『左方移動』東京 : 研究社.

Rando, Emily and Donna Jo Napoli (1978) “Definites in *There*-Sentences.” *Language* 54: 300-313.

（宮城学院女子大学）
masutomi@mgu.ac.jp